指揮者　森口真司

Shinji Moriguchi, conductor

大阪府出身。京都大学文学部を経て1989年東京藝術大学音楽学部指揮科入学、1995年同大学大学院修了。修了後すぐ「プラハの春」国際音楽コンクール指揮部門において第3位受賞（1位なし）、プラハの春国際音楽祭に出演しプラハ放送交響楽団を指揮した。以降、東京フィルハーモニー交響楽団、東京都交響楽団、札幌交響楽団、佼成ウィンドオーケストラほか全国各地のオーケストラに客演する。また岩城宏之氏に認められ、2003年から２年間オーケストラ・アンサンブル金沢の専属指揮者を務めた。オペラ指揮者として、30を超す作品を100回近く指揮し、東京二期会を中心に数多くの公演に合唱指揮者として参加、その手腕は極めて高く評価されている。現在大分県立芸術文化短期大学教授。

Program Note

J.S.バッハ（シェーンベルク編曲）：
前奏曲とフーガ 変ホ長調BWV552「聖アン」

アルノルト・シェーンベルクは1874年ウィーンの靴屋の息子として生まれた。両親は特に音楽家ではなかったが、8歳からヴァイオリンを習い、作曲を独学で学んだ。そして、銀行員として就職し、アマチュアオーケストラで演奏を続けた。この時の指揮者がツェムリンスキーであり、シェーンベルクの唯一の作曲の師となる。このころ、古典的な習作の弦楽四重奏曲ニ長調を作曲したところ、この曲はツェムリンスキーの推薦で1897年に初演されることになり楽壇へのデビューとなった。

その後、銀行を退職し指揮や編曲をしながら音楽家としてのキャリアを積むが、最初の数年は苦労したようであった。Op.1-3の歌曲は聴衆から拒絶され、かの有名な弦楽六重奏曲「浄夜」も初演後のバッシングはかなりのものであったりと、なかなか素直に民衆には認めてもらえなかった。また、ベルリンのキャバレーで職を得たものの、求められたものは通俗的な音楽だったので半年とたたずやめてしまった。

作曲活動に明るい兆しが見えたのは、1904年に私的講習会を開催したときにヴェーベルンとベルクが参加したことである。後にこの3人は新ウィーン楽派と呼ばれるようになる。また、この時期にツェムリンスキーと創造的芸術家協会を設立し、マーラーを名誉会長に迎えることができた。マーラーはシェーンベルクの「浄夜」を高く評価し、以降、二人の交流と相互作用は続いた。ウィーンの楽友協会から5分くらいの所にシェーンベルク・センターがあるが、そこにはシェーンベルクが書いたマーラーの交響曲第9番についてのメモが残っている。

シェーンベルクのもう一つの側面を挙げるとすると、画家としても達者であったことであろう。シェーンベルクがマーラーの葬儀を描いた油彩画がある。シェーンベルク・センターには作曲家が書いた絵がいくつも展示されているので、もしご興味がありウィーンに行かれた場合には訪れてみるとよいと思う。小さいながらも他にも興味深い資料が多数展示してある。

さて、シェーンベルクの編曲作品といえば、ブラームスのピアノ四重奏曲の管弦楽版が有名であるが、バロック作品も好んで編曲している。ウィーンの18世紀前期の作曲家モン（M.G.Monn）のチェンバロ協奏曲やチェロ協奏曲、そしてJ.S.バッハのコラールや本日演奏する「前奏曲とフーガ（変ホ長調、BWV552）」の管弦楽編曲版などである。これはどのクラシック音楽の作曲家（現代においても）にも言えることだが、作曲家になる過程でバッハの音楽を学ぶことは避けられない。ポリフォニーの技法を勉強する＝バッハの作品を勉強すると同等であるからである。もちろん、ベートーヴェンもワーグナーもしかりである。シェーンベルクもまたバッハを先生と称し、1931年の「国民的音楽」という論文でバッハから学んだことを書き綴っているし、彼の開発した十二音技法で書かれた「管弦楽のための変奏曲」ではBACH音型（つまりシ♭-ラ-ド-シ）を潜ませている。

本日演奏するシェーンベルクが編曲した「前奏曲とフーガ」では、オルガン譜からオーケストラスコアへの単なる音符の配置転換ではなく、彼流の多くのアーティキュレーションが盛り込まれている。ダイナミクスもアクセントも原曲の範疇を超えた指示があり、バロック音楽としてのバッハを期待して聞くとかなり面食らうことであろう。本日はその作曲家のこだわりをなるべく忠実に再現すべく演奏したいと思う。余談であるが、1箇所、弦のピッチカートの音符の上に＜＞が書かれているが、これはどのように弾いたらよいものか、アルノルト先生にお伺いしたいところである。

（チェロ　横山真男）

参考文献：樋口隆一「バッハとモーゼのはざまで」、名曲解説ライブラリー「新ウィーン楽派」ほか

Program Note

マーラー：交響曲第9番 ニ長調

マーラーが交響曲第9番を作曲したのは1909年夏、イタリアのアルト・シュルーダーバッハでの休暇中であった。ほぼ2か月間で書き上げ、翌1910年4月、ニューヨークで浄書の完成がなされる。『大地の歌』を含めると10番目の交響曲であり、次作の交響曲第10番が未完成のままマーラーは死去したため、この曲が完成された最後の交響曲となる。演奏時間は約90分に及ぶ大曲であり、マーラーの死後の1912年、マーラーの部下でもあったブルーノ・ワルター指揮のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団によって初演された。各楽章の構成は以下の通りである。

第1楽章　Andante comodo（アンダンテ・コモド）ニ長調　4/4拍子
自由なソナタ形式

第2楽章　Im Tempo eines gemächlichen Ländlers.
Etwas täppisch und sehr derb
（緩やかなレントラー風のテンポで、いくぶん歩くように、そして、きわめて粗野に）ハ長調　3/4拍子

第3楽章　Rondo-Burleske: Allegro assai. Sehr trotzig
（「ロンド＝ブルレスケ」アレグロ・アッサイ　きわめて反抗的に）イ短調　2/2拍子

第4楽章　Adagio. Sehr langsam und noch zurückhaltend
（アダージョ　非常にゆっくりと、抑えて）変ニ長調　4/4拍子

交響曲第9番はマーラーの最高傑作と言われる。標題こそ付いていないが、この曲は「決別」、「別れ」を彷彿させる。事実、終楽章の最後の小節にマーラー自身がersterbend（死に絶えるように）と書き込んだことがその印象を強め、マーラーはこの交響曲をもって自らの人生への別れを告げたのだと、論じられたりもする。当時のマーラーを取り巻く状況をつなぎ合わせてみよう。

1907年、ウィーン宮廷歌劇場総監督であったマーラーはマスコミから大きな批判を浴び、その結果、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場へと活動の拠点を移すことになった。そのメトロポリタン歌劇場での仕事も長続きせず、1909年にはニューヨーク・フィルへの指揮者へと活動の場を移す。仕事での転機に加え、最愛の娘、長女マリアが病のためにわずか5歳の若さで死去し、さらにマーラー自身も重い心臓病にかかっていることが判明した。また、第9番の作曲をしたイタリアのアルト・シュルーダーバッハでの休暇に妻アルマは同行せず、そのことが不仲を想起させ、マーラーが公私とも最悪の状況にあったと論じる根拠となった。

実際のマーラーはどうだったのだろうか。確かに1908年頃のマーラーは精神的にも肉体的にも消耗していたようである。しかし、1909年頃になると精神的な落ち着きを取り戻し、仕事にも前向きに取り組んでいた。ニューヨーク・フィルの指揮者就任は、長くオペラ指揮者として活躍していたマーラーにとって、交響曲や管弦楽曲のコンサートの指揮は新たな刺激であった。第9番の作曲についても、マーラーはワルターに宛てた手紙のなかで、「それは狂ったように大急ぎで、あわただしく、ほとんど書きなぐられたので、とても他人には読めないだろう。」と書き、一気呵成に夢中で書き上げた様がうかがえる。マーラーは大変精力的に交響曲第9番を書き上げていったのである。

この曲には間違いなく「決別」や「別れ」が根底の作曲概念としてあるだろう。しかし、単純に現実的な死への恐れを抱いたマーラーが諦観を持って、自らの遺書として作曲したものではない。故郷ボヘミアの自然への愛、自分の生き様を肯定するための激しい激情、自らを批判する他者への皮肉、繰り返される人生の浮き沈みに抗う強靭な自尊心…。この曲の各所に生命力あふれる強い意志が、斬新な作曲技法、卓越したオーケストレーション、マーラーらしい執拗ともいえる記譜上の表記とともに個性的に表現されている。まさしくこの交響曲はマーラーが持ち得る作曲技法の全てを注ぎ込んだ、集大成と呼べる最高傑作なのである。

フライハイト交響楽団の創設から四半世紀が経った。旗揚げ公演ではマーラーの交響曲第9番を演奏するんだと意気込んだ曲を、50回記念の定期演奏会で再演することは、創設時から在籍する団員にとっては万感の思いである。本日は当団創設時と変わらない情熱、そして団として成熟し、深みを増した表現をご覧に入れようという想いを、また、ここまで当団をご支援してくださった多くのお客様、諸先生方にへの心からの感謝の気持ちを、この曲の持つ音楽のもつ力で存分に語り、表現したい。

（トランペット　荻野雄太）